

# モンゴル文字 半世紀ぶりよみがえれ

## 指導に諭教 贈るも板黒

大阪のNPO

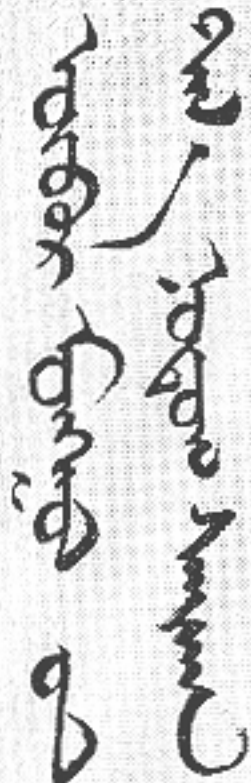
モンゴルを支援する大阪市のNPO法人、モンゴルパートナーシップ研究所（略称モピ、理事長＝松原正毅・国立民族学博物館教授）は、社会主義時代に禁じられていた伝統的なモンゴルの文字の復興を目指す同国に黒板二百五十枚を贈る。十九日、全土の小学教

諭を首都ウランバートルに招き、黒板を渡すとともに文字教育の講習も受けてもらう。全国約六百の小学校の黒板が老朽化し、大半が使用できない状態だという。

輸送には大阪国際交流センター（小林庄一郎理事長）が協力、黒板を同センターの船便に同乗させた。浮いた資金は各地から約百五十人の教諭を集める交通費にした。現地の教育大学の専門家が教授法を教え

た後、黒板を一一枚ずつ学校に持ち帰ってもらった。モピの広報担当、小長谷有紀・同博物館助教授は「全土に黒板を届けるという難問が解決できた。今後、も全土に行き渡るまで援助を続けたい」と話している。

同国では社会主義政権下の約半世紀間、ロシアのキリル文字が使われ、チンギス・ハーンが定めた文字の系譜を引く民族固有の文字は衰退した。民主化が進んだ一九九〇年代に復興が叫ばれたが、教えられる教師がほとんどいないため運動は難航した。ハード面でも、



モンゴルの文字で書いた「美しい内蒙古 愛しい草原（オウトンゴアさん筆）。モンゴル帝国の時代からウイグル文字などの影響を受けながら徐々に縦書き文字として確立